

SY3-2

伊達市版ネウボラ事業 妊娠期からの切れ目のない支援 そして親子が笑顔になる架け橋

畠 香苗

福島県伊達市役所 教育委員会 こども部 ネウボラ推進課

人口減少と少子高齢化が進んでいる当市では、まち・ひと・しごと創生の取り組みとして平成28年1月に「伊達な地域創生戦略」を策定した。若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる取り組みとして「伊達市版ネウボラ事業」が明記された。

事業を開始するにあたり、1年間、児童福祉部門と保健部門が協議を重ね平成29年4月に子育て世代包括支援センターを設置し、健康福祉部健康推進課ネウボラ推進室を主管課として「伊達市版ネウボラ事業」を開始した。この事業についてはフィンランドのネウボラの考えを取り入れたいという思いがあり、当市では子育て世代包括支援センターというより「伊達市版ネウボラ事業」で浸透している。

開始にあたっての協議が当事業に与えた影響は非常に大きい。「どのようなコンセプトにし事業展開にするか」を保健、福祉の垣根を取り払い、今ある課題を解決することだけにとらわれず、伊達市の親はどんな子育てを望み、また、どんな子どもたちに育つといいかという目指す姿を追求することは自然と利用者目線で考えることにつながった。そして、すべての妊産婦と就学前の乳幼児を対象にし、「妊娠期からの切れ目のない支援 そして親子が笑顔になる架け橋」をコンセプトとし、寄り添う支援と保健と保育の一体化を2本の柱とし推進することとなった。これらを一緒に協議したことで、その後の保健と福祉を中心とした庁内の関係機関の連携が推進されたことも大きな成果である。

伊達市版ネウボラ事業の特徴は、妊娠期から原則小学校入学まで同じ担当のネウボラ保健師が寄り添いながら切れ目なく支援すること、特に妊娠期から乳児期の支援を手厚くしていることである。このことにより、育児不安が強い時期を支えるとともに、健康増進計画「健康だて21」に掲げられている「次世代の健康をつくる」、つまり、生涯を通じた健康づくりの強化にもつなげている。生活リズムや食の大切さ、かかわりの大切さを折にふれ伝えて、よりよく子育てができることを目指している。

そして、育児パッケージの贈呈や産後ケアの実施、携帯電話の利用等次の支援につながるよう事業を組み立てたことにより、顔の見える関係が築け、子育て家庭が以前より保健師をスムーズに受け入れるようになったと感じている。

そして、令和3年4月の組織改編により、教育委員会こども部ネウボラ推進課となった。こども部は児童福祉と幼児教育を担い、学校教育を一体的に推進するために教育委員会に所属している。そこに関係機関の連絡調整を行う保健師を配置した。あわせて、課内に市区町村子ども家庭支援拠点を配置し、様々な背景をもつ子育て家庭に迅速に支援する体制を整えた。なお、子育て家庭へ支援を行う保健師は健康推進課の所属のままネウボラ保健師の併任辞令を発令し、保健部門との連携を維持させている。

この体制により、保健と福祉に教育が加わり関係機関の連携がより強化され、子どもたちの健やかな成長を促し安心して就学できることを目指すこととなった。そこで、今までの取り組みと転換期を迎えた現状を報告する。